

## 【東京】23区では少ない在宅注力病院「患者は年間100人ペースで増」-小笠原雅彦・同善病院副院長らに聞く◆Vol.2

2023年3月24日（金）配信 m3.com地域版

医療やケアをワンストップで提供する「コミュニティ・ホスピタル」を目指し、運営の改革を進める同善病院（台東区）。2022年4月に本格的に始まった在宅医療部門は年間100人ペースで患者が増えており、単独型の機能強化型在宅療養支援病院に指定されているところは台東区と周辺の計4区では同院のみという。これまでの手応えについて小笠原雅彦副院長に、外来・病棟・在宅を担う総合診療のやりがいについて専攻医の窪田泰輔氏に聞いた。（2023年2月2日インタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら



小笠原雅彦氏（中央）と窪田泰輔氏（右）

——医療法人社団「同善会」の現在の人的体制と患者数を教えてください。

**小笠原** 従業員は130人ほどで、このうち常勤は約80人です。常勤医は7人おり、リハビリに力を入れているため常勤の各種セラピストが29人いることは特徴です。回復期リハビリテーション病棟（45床）を持つ当院は病棟だけでなく外来と訪問下でもリハビリを提供しています。患者さんが潜在的に持つ能力を伸ばしていくリハビリは、在宅医療や「地域で暮らす」をテーマにしているコミュニティ・ホスピタルと親和性が高く、コミュニティ・ホスピタルがリハビリ機能を持つのは今後の流れになっていくのではないのでしょうか。

法人の外来部門である「同善会クリニック」の1日の患者数は70人ほどで、在宅医療での訪問患者数は約90人。在宅患者さんはほとんどが居宅の方です。2022年度における1月までの平均病床稼働率は82%です。

——病院で在宅医療に力を入れているところは少ないと思います。

**小笠原** そうですね。在宅医療担当の常勤医が3人以上いる「機能強化型在宅療養支援病院（単独型）」は当院がある台東区、周辺の荒川区、足立区、墨田区の計4区では当院のみです。連携型の機能強化型や機能強化型ではない在宅療養支援病院は複数ありますが、一つの病院内で医師が連携しつつ24時間365日の訪問体制を組んでいるところはなく、23区内でも少ないと思います。

在宅患者さんは地域のケアマネジャーや訪問看護ステーションから紹介されることが多く、当院の外来・入院からの移行もあるほか、最近は高度急性期病院からの紹介も増えてきました。在宅患者さんの急変時にレスパイト入院ができるのは、病棟を持つ病院ならではの強みでしょう。今のところ、年間100人ペースで患者さんが増えているので順調と言えるのではないのでしょうか。

——小笠原先生が同院に加入したのはどんな経緯だったのですか。母校は名古屋大学です。

**小笠原** 「同善病院をコミュニティ・ホスピタルに成長させよう」という話に魅力を感じました。私は医師5年目の2018年に名古屋大学が行う総合診療専門医養成プログラムに入り、2020年からその一環として豊田地域医療センターに勤務しました。同センターも「コミュニティ・ホスピタル」を掲げており、そのあり方を在宅部門の副部門長などを務めつつ2年間学びました。

こちらで良い出会いがありました。副院長を務める大杉泰弘先生は過去、15年ほど前にコミュニティ・ホスピタルの一つのモデルをつくった潁田（かいた）病院（福岡県飯塚市）に勤めていました。大杉先生の出身地が愛知県なので、「地元でコミュニティ・ホスピタルをつくろう」と2015年に豊田地域医療センターに加入し、それまでの学びを生かして同年に藤田保健衛生大学（現藤田医科大学）の総合診療・家庭医療プログラム（現藤田医科大学総合診療プログラム）をつくったのです。

——同善病院は藤田総診の研修先の一つですが、こういった人・組織のつながりがあってのコミュニティ・ホスピタル化構想なのですね。

**小笠原** 大杉先生などと働くなかで、「東京の同善病院をコミュニティ・ホスピタルに」という話が持ち上がり、「チャレンジングだけど自分がやりたい理想の医療に近いな」と思いました。2022年4月に加入し、在宅部門の立ち上げに携わりました。

——窪田先生は藤田総診の一環でこちらで働いていますが、なぜコミュニティ・ホスピタルに関心を持ったのですか。

**窪田** 私は専攻医3年目で、今年、総合診療専門医の資格を取得する予定です。現在は藤田医科大学の連携地域医療学に所属しており、出向として2023年1月からこちらで週に5日、働いています。当院で総合診療専門医を目指す専攻医は基本的に外来・病棟・在宅の3部門を担い、地域活動に携わることもあります。

コミュニティ・ホスピタルに興味を持ったのは、多職種と協力しつつ患者さんの生活面を含めてサポートしていきたかったためです。医療の、特に医学について医師が知っていることは少なくありませんが、患者さんを支える手段としてのケアやリハビリも含めると、関わり知れることは一部です。各種セラピストやソーシャルワーカーなどが持つ情報や意見も共有しながら、患者さんにとっての最善や幸せが何か検討できれば、という思いでこちらでの勤務を選びました。

——まだ同院に勤務して1カ月なのですね。慣れないことも多いのでは。

**窪田** 3部門を同時並行で行うのは初めてなので忙しさは感じます。バランスを考え、頭を切り替えつつやっていたかなといけなないので、マルチにスキルを磨く必要があるなど。もう少し時間が経てば仕事を俯瞰的に見たり、コアな部分を見極めたりできるようになるのではないのでしょうか。

一方で、患者さんを継続的に診ていけるのは楽しいです。患者さんの在宅復帰を目指す回復期リハビリテーション病棟の特性でもありますが、既に自分が担当した病棟患者さんが在宅に移行し、患者さんのご自宅で訪問診療を行っています。病院では分からない患者さんの生活面が見られ、その人をより深く知っていけるのは総合診療の醍醐味だと感じています。

——小笠原先生にお聞きます。コミュニティ・ホスピタル化に向けてのこれまでの手応えと今後の展望は。

**小笠原** 徐々に地域の認知度が高まっているように感じています。当法人では地域活動を「地域の活動に参加する」形と、イベント主催など「地域に向けて活動する」形の2方向で展開しており、今のところ前者で知り合った人、つまり町内会や商店会、社会福祉協議会などの人から医療的な相談を受けるようになってきました。今後は後者でのつながりも生きてくると思います。

展望としては、教育機能をさらに高めたいですね。当院は東京にありますが、下町の地域性が生きていることもあってこの医療モデルを地方でも応用できると思います。コミュニティ・ホスピタルとしての質を高めつつ、将来的には医師だけでなく看護師や各種セラピスト、ソーシャルワーカーなどの教育も担いたいと考えています。

2014年名古屋大学医学部卒。豊橋市民病院での初期・内科研修後、同大の総合診療専門医養成プログラムに入り、総合診療を学ぶ。豊田地域医療センター・在宅医療支援センターの副部長などを経て、2022年から同善病院の副院長、在宅医療センターセンター長、コミュニティ支援室室長。

◆**窪田 泰輔（くぼた・たいすけ）氏**

2018年杏林大学医学部卒。河北総合病院での初期研修後、2020年に藤田医科大学の総合診療プログラムに加入。2023年1月から同善病院に勤務し、外来・病棟・在宅の3部門を担う。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

